

広告特集

企画・朝日新聞社メディアビジネス局

10月は乳がん啓発月間

あなたから大切な人へ勧めよう 乳がん検診

依然として、増加傾向にある乳がん。それでも早期発見・治療ができれば、高い確率で完治が可能です。ご自身のためにも、ご家族のためにも、積極的に乳がん検診を受けましょう。乳腺専門医の皆さんに、検診の大切さをお聞きました。

日本赤十字社愛知医療センター
名古屋第二病院乳腺外科部長

小林尚美氏

マンモグラフィで無症状の乳がんが見つかります

乳がんは女性のがんの中で罹患率が一番高く、年代は40代から60代に多いです。日本では40歳以上の女性にマンモグラフィ検診の受診が推奨されています。マンモグラフィにより無症状でも乳がんが見つかる可能性が高くなります。マンモグラフィの撮影は乳房を圧迫するため、痛みを伴うことがあります。圧迫することで良い画像が得られ、被ばく線量が軽減できます。圧迫は短時間です。痛みを和らげるには、体の力を抜いてリラックスして受けること、生理後の乳房が柔らかい時期に受けられると良いと思います。最近の話題としては、コロナワクチン接種後は6～10週間空けて受け

て頂くことが望ましいといわれています。

また、日頃からご自身の乳房の状態を意識するようにしましょう。マンモグラフィで異常がなくても、しこりを触れる、乳頭からの血性の分泌物がある、皮膚にくぼみがあるなど、異常を自覚された場合は、速やかに乳腺外科で診察を受けるようにしてください。症状があるにもかかわらず放置して骨や肺、肝臓などに転移すると治る可能性は低くなります。

乳がんは早期発見で治る可能性の高いがんです。ご自身や、大切な方のためにも無症状でも検診を受けることが大事です。



藤田医科大学ばんだね病院外科教授

内海俊明氏

がんの状況や患者さんの希望に応じて選択される手術と放射線治療

乳がんの多くは、乳汁を分泌する乳腺組織の末梢に存在する乳管や小葉から発生します。最初は、乳管内や小葉内にとどまっています(非浸潤がん)が、やがて、周囲に広がり浸潤増殖します(浸潤がん)。非浸潤がんは適切な治療で完治が見込まれます。治療は手術と放射線療法、薬物療法があります。手術で乳房内のがんを部分的に切除し、がんが完全に取りきることができ、温存した乳房の見栄えがよければ、乳房を残す「乳房温存術」が可能です。がんの範囲が広い場合や、離れた場所に病巣が二つ以上ある場合は、「乳房切除術」が検討されます。

放射線治療は温存した乳房や乳房切除後の胸壁や周囲のリンパ節からの再発を防ぐために、行います。特に乳房温存術後は放射線治療を加えると、乳房内再発が3分の1に減り、局所の再発制御は乳房全摘とほぼ同等になります。乳房再建を伴う乳房切除術を選択される患者さんも増えています。



がんの性質に応じて選択される最適な薬物療法

薬物療法には、「抗がん剤」「ホルモン療法」「分子標的療法」があります。実際の治療は様々な情報を総合的に考慮し行います。顕微鏡でがん細胞を観察する病理検査では、がんの性質なども調べます。例えば、がん細胞がホルモン受容体やHER2タンパクを有している(陽性)か、有して無い(陰性)かなどを調べます。

ホルモン受容体陽性では、エストロゲン(女性ホルモン)でがんが増殖する性質があるため「ホルモン療法」が有効です。HER2陽性では、がんの増殖に関与するHER2タンパクを狙い撃ちしその働きを抑える「分子標的療法」が有効です。ホルモン受容体・HER2共に陰性の場合、HER2陽性の場合、ホルモン受容体陽性であっても再発リスクが高い場合などは、「抗がん剤」が適応されます。副作用は薬剤の種類や個人差でまちまちです。ホルモン療法では発汗やほてりといった、更年期障害のような副作用を伴うことがあります。抗がん剤に関しては、一般的に骨髄抑制、脱毛、吐き気・嘔吐などがあります。吐き気は制吐剤が進歩し、昔に比べるとコントロールし易くなっています。

乳がん治療は、着実に進歩しています。早期発見は最善の対策であるのは間違いありません。高齢初産、未産、閉経年齢が遅い(55歳以上)、閉経後の肥満、飲酒、乳がんの家族歴などはリスク要因とされています。定期的な検診を習慣化しましょう。

乳がんで命を失わないためにあなたが、私たち医療者ができること、やるべきこと

日本人女性にとって乳がんは最多のがんですが、早期発見・治療でたいいの乳がんは完治します。無症状でも積極的に検診を受けること、有症状の方は専門施設を急ぎ受診すること、あなたの普段の心がけが乳がんの最善の医療につながるのです。ぜひ自ら進んで乳がん検診を受けてください。

さて、私たち乳がんの専門家は以下の課題を念頭に置き、最善の乳がん医療を提供す

べく日々努力しています。

①「高水準の検診と精査の実践および検診・精査施設間の密接な連携」

非触知病変を含む早期乳がんの軽微な所見も見逃さない精緻な検診から、精査施設の正確かつ低侵襲なインターベンション(針生検など)による確定診断に至るまでの切れ目ない連携が肝要です。

②「個別化・適正化された患者毎のオーダーメイド治療」これは患者の背景(合併症、遺伝性、再建・挙児希望など)や乳がんの個性に合わせた緻密な治療を意味します。

乳がんに対する最善の医療は検診による早期発見から始まります。あなた自身を守るために乳がんに関心を持ち、乳がん検診を定期的に受けましょう。

三河乳がんクリニック院長

水谷三浩氏

